



## 【 駿河湾より富士を仰ぎ見る 】

伊豆半島南端の石廊崎と御前崎を結ぶ 56km の湾口の、最深部は 2500m と日本一深く、今から60万年前に誕生。

湾口には、左右に赤と白の灯台が立っており、入船の目印になっています。



富士山清水みなとクルーズ船に乗船です。  
カモメが人懐こく、餌をもらえると  
思い、一定の距離を保ち行列を  
なしていました。  
残念ながら、売店はお休みで、船も  
貸切状態でした。

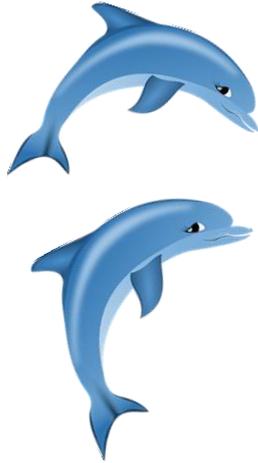




地球深部探査船ちきゅう

櫓のようなものは、海底に7000m まで穴をあけ、掘削したサンプルを地上に持ち帰り、主に地震のメカニズムの調査や火山活動の研究、地球の内部構造のデータ収集をしています。日本に一隻しかありません。2026年1月12日南鳥島へ、レアアース試験採掘の為清水港より出航しました。

運が良ければ、イルカに会えるというアナウンス通り、5頭のイルカが船底を往来したり、船べりを共に泳ぎ楽しませてくれました。



ドルフィンウォッチング



すし横丁のオブジェ



← こんなのを食べました。  
(S パルストリームプラザ)

次郎長は、晩年清水港振興に尽力しました。明治19年、清水波止場船宿「未廣」を開業。清水区鶴舞町に現存していた部材を使用して、平成13年復元したものです。

清水次郎長は、本名山本長五郎、米問屋山本次郎八の養子であり、次郎八の長男であることから、次郎長と呼ばれるようになりました。

職業は博徒と言われ、私を知るのには、任侠のイメージしかありませんでしたが、情に熱く先見の目を持ち、清水に貢献した人物であることを初めて知りました。三度の結婚で初代のお蝶が病死。忘れないようにと2代目オチヨ、3代目ハナもお蝶と改名。女性心理としてどうなのかなあ？と……

次郎長は、3代目お蝶に看取られ73歳で没。

船宿内には、世界に目を向けるべく、英語塾を開き、自らも学んだとありました。



清水の次郎長



清水次郎長の船宿

清水の次郎長は、今でいう実業家です。

茶の輸出商と静岡の茶商と廻船問屋を結び付け清水～横浜の定期航路を誕生させました。

## 《フェルケール博物館》（港と船の博物館）



**安宅船(大型軍船)**

甲斐の武田氏が、今川水軍から手に入れたものを再現している。戦闘的な構造だが、平時は廻船業務も行っていました。



**徳川家御座船(模型)**

江戸時代には漆塗りや豪華な金具で装飾されていました。将軍家、大名家が使う船(関船とも言う)大名たちは参勤交代にも使用していた。



**菱垣廻船**

江戸時代に江戸と大阪を結んだ廻船(貨物船)で両舷菱組格子が組み込まれていたため、菱垣廻船と言われた。



**あみだくじの由来**



↑  
多人数の中から、荷役の人夫を選ぶ時に使用。

持ち手を中心に放射状に紐を広げた形が阿弥陀如来の光背に似ているところからきています。



**船筆筒**

← **観音開佐渡型船筆筒**

船筆筒は、往来手形、印鑑、貨幣、帳面等を入れておく金庫です。

外部は樺、内部は桐材で作られており、船が難破した場合、海に投げ込まれると、海面に浮かび海岸に上げられ、船主に変換されることを考慮しての構造です。船筆筒をあけるには、何本もの鍵が必要で内部には、隠し引き出しも作られています。



輸出用茶箱

## 《輸出用茶箱》

- 日本茶を海外輸出する為の茶箱は明治時代初期から以下のように変化していった。
- ①初期には、箱内は鉛板内張りで茶箱絵を貼り付け、アンペラで包まれた後に藤紐で縛った。アンペラとは、アジア南部に自生する葦科の植物で、ゴザのように編んで梱包に使った。
  - ②ブリキ板内張となり正面に文字のみ蘭字、ほかの面には、茶箱絵が張られた。中には小分けされたパッケージが入れた。外装はアンペラと藤紐がかけられ、薄紙の蘭字が、貼られた。
  - ③戦後、日本茶の輸出先が、中東やアフリカ諸国向けに移行するのに合わせて、ベニヤ板箱にマニラ麻包装、鉄帯締めになった。蘭字も印刷したものが使われた。



輸出用茶箱のラベル

展示室説明より引用



明治時代～昭和30年代

日本茶は、再製という工程を経て輸出するが、国内一の茶産地でありながら清水には工場が無く、横浜港から輸出していた静岡県茶業組合連合会、海野孝三郎らによって工場設立や外国航路が開かれ、直接交易が叶うその当時、アメリカが最大の輸出国でした。

### お茶の発酵の種類

